

近世石清水八幡宮地下神人神楽座の諸様相

―小林家旧蔵文書より―

竹 中 友里代

目次

はじめに

一、石清水神楽と神楽座人

(一) 神楽座と神子

(二) 寛永の遷宮儀式と神楽座神人

(三) 安居神楽と神楽座の役務

(四) 安居神楽の執行日と祭主

二、神楽座神人の生業と諸活動

(一) 神楽座神人の生業

(二) 神拝作法伝授と検知

(三) 壇所町の町年寄として

(四) 壇所町の西福寺

おわりに

〔表1〕・〔表2〕・石清水八幡宮全図壇所町部分図

翻刻史料

神楽座神人小林家旧蔵古文書目録

はじめに

石清水八幡宮では毎年二月と十一月に初卯の御神楽が挙行されていた。八幡宮神楽については、「楽家録」^①によると「此神楽并放生会断絶年久矣。然社務田中氏要清与楽所志同一而当于祭礼之日音楽奉納之数年而後、延宝第六春三月達于征夷大将军源 家綱公之上聞有御再興焉。自是以来復上古矣」とあり、石清水社務田中要清は神楽と放生会を再興するにあたり、京の楽所と志を同じくして音楽を数年奉納していた。後に延宝六年（一六七八）將軍家の知る所となり以後初卯の御神楽と放生会は正式に上古に復したとされている。延宝七年の放生会再興に先立ち、延宝四年三月二十四日には尾張徳川家一門の支援を得て、社務田中要清によって御神楽は再興されていることはすでに明らかにしている。^②「楽家録」では御神楽及び放生会両者ともに再興年を延宝六年のように記述しているが、二季の初卯御神楽は、これ以降近世石清水の恒例祭祀となる。また他に石清水では安居神楽・高良神楽や八幡臨時祭や放生会でも奏楽があるという。

本稿で取り上げる文書群は、神道研究者である嵯峨井建氏が購入し

た文書群⁽³⁾の二次調査分である。総点数は九四点あり、巻末に掲げる「神楽座神人小林家旧藏古文書目録」(二九六頁)と分類項目別点数を〔表1〕(二八二頁)に示した。なお、本文中で特に指定しない限りアラビア数字は古文書目録の文書番号とする。

本文書群は、市場に流出したため伝来は不明であるが、〔表1〕から神楽座人の補任状十二点、神楽座神人関係が十二点、神拝作法など神道関係が九点あり、神楽座神人であった小林家の旧藏文書と推定し、名称を付した。この神楽座神人文書を通して安居神楽の具体相と石清水地下神人の活動の諸相を明らかにする。

一、石清水神楽と神楽座神人

(一) 神楽座と神子

慶長五年(一六〇〇)石清水八幡宮領内に一斉に発給された三百六十一通の家康領知朱印状は、山上宿坊・山下寺庵や社家・神官・所司・侍層から百姓に至るまで個別人身支配のため、安居神事執行を条件に出されたが、將軍代替わりごとに安堵される朱印状は、四代家綱の寛文五年(一六六五)以降は、神人の組ごとにまとめて発給されるようになる⁽⁴⁾。この寛文印知から神楽座神人と神子をみていこう⁽⁵⁾。

石清水八幡宮領内

一百三拾石式升

山城国綴喜郡八幡庄

綱座五人

一百壹石内

七拾三石式斗
式升神供料

同断

宮守五拾人

一八拾壹石

同断

駕輿丁座七人

| | | |
|-----------|----|---------|
| 一三拾四石壹斗六升 | 同断 | 相撲座貳人 |
| 一三拾壹石三斗三升 | 同断 | 達所小綱座五人 |
| 一三拾石 | 同断 | 神楽座八人 |
| 一拾九石九斗余 | 同断 | 神馬副三人 |

右都合四百貳拾七石四斗余事、任慶長五年五月廿五日、元和三年八月十五日、寛永十三年十一月九日先判之旨、永不可有相違者也、

寛文五年八月十五日

御朱印

綱座・宮守・駕輿丁・相撲座・達所小綱座・神楽座・神馬副が七座組としてまとめて一通、合わせて四二七石四斗一合の知行が宛がわれた。神楽座はこの七座組に属し、神楽座は八人で構成され、その知行高は三十石である。

ここで1の補任状を掲出する。

石清水八幡宮寺

御神楽座職之事

勾当大夫小林九郎右衛門尉重満

右以彼人令所補任如件

延宝三年正月十日

神官紀宿祢檢知豊親(花押)(印)

神官系神人の補任状を發給する檢知から、小林九郎右衛門尉重満に對して延宝三年（一六七五）神樂座神人勾当太夫が補任された。明治二年まで勾当太夫補任状は合わせて七通あり、これらがすべて小林家伝來とするならば、小林家は神樂座のうちの勾当太夫を代々繼承していたことになる。正徳元年（一七一）の「神役之書上ケ」37（史料11）によると勾当太夫の朱印高は二石八斗であつた。

また神樂座神人には、三管太夫・勾当太夫・後太夫・府生太夫・才松太夫の別がある。⁶⁾三管とは笙・箏・横笛を總稱する。勾当とは記録や勘定の事務をつかさどり、府生は六衛府の下級官吏で雑役に従事した主典の次位者であり、才松は丁稚小僧の隠語で若年者の見習いを示す。太夫は古典芸能の集団の長の称号であり、これらの名称が往古は神樂での担当職務を由來としたであろうが、近世段階での各名称による役割を示す史料を持たない。

ただし元禄三年社領改では、神樂座家領三十石は、三管太夫森助左衛門から下役に配分され、後太夫には二石八斗が配当されていた。⁷⁾「神樂座入之定書」40（史料14）では、宝暦八年（一七五六）神樂座に入座する際は、餅一重に、錫の五合酒德利一本を座中に配り、またそれ以前の饗宴の振舞いは儉約の時節柄、取りやめたという定書が三管太夫から出されている。このことから、三管太夫は、神樂座の長であり、神樂座の構成員は、代々繼承しつつも多少の出入りがあつた。17・18（史料4・5）寛文十年（一六七〇）九郎右衛門は神樂座神人の知行八斗四升七合を質に銀を拝借し、19（史料6）の譲り状で元禄三年（一六九〇）には、九郎右衛門は、二石八斗の神樂座勾当太夫株

を小林仁右衛門に譲渡している。補任状の宛所が九郎右衛門と仁右衛門が混在していることから、両者の間で神人株が譲渡されていたことがわかる。三管太夫の森助左衛門は、この小林九郎右衛門はじめ七名の神樂座神人を率いていた。

次に神子については、寛文印知では神官知行分に組織されている。⁸⁾

石清水八幡宮領内

一、式拾石 山城国綴喜郡八幡庄 俗別当

一、拾九石 同断 宮太夫

一、式拾石 同断 檢知太夫

一、拾四石 同断 神子

右、都合七拾三石事、任慶長五年五月廿五日、元和三年八月十六日、寛永十三年十一月九日先判之旨、神官全收納、永不可有相違者也

寛文五年八月十五日
御朱印

神官知行分合わせて七十三石の内、俗別当二十石・宮太夫（神主）十九石・檢知太夫二十石に神子十四石が給され、先に見た神樂座神人とは別に、神官分の知行に神子が位置づけられている。

天明七年（一七八七）「八幡末社御朱印高之覚」にある「遷宮下行米覚」⁹⁾には神人別に配分する石高が書き上げられている。はじめに善法寺・田中家に各七十二石等社務家が記され、次に俗別当三十三

石、宮太夫二十二石五斗、檢知太夫二十二石五斗、「惣権一」に十五石と、一（神子）の配分高が記録される。続いて公文所・兼官などの所司、六位座・神宝所座・宮守座等が書き上げられた後に、御綱引や駒形座などの地下神人が続き、そこで神楽座は四石五斗と記されている。書き上げられた順からも、地下神人である神楽座とは一線を画し、神子は神官に属していた。延宝六年（一六七八）初卯御神楽で、はじめて勤仕する巫女紀兼子は俗別当紀兼行の養子であった。⁽¹⁰⁾このことは、明治五年士族編入願書でも示されている。⁽¹¹⁾この時石清水に仕える多くの神人が士族編入を願い出るのであるが、男山八幡宮元神子紀豊女は「同社之元社士ト同列、昇下之者二者無之」と神領自治を担っていた侍層の社士と同列であるという。「祖代ヨリ三代以上の代数有之者ニ而、新家ニ無之、婦人ニ候得とも本文之通り詮議いたし候」とある。紀氏は、代々神子を輩出する家で、女性ではあるが詮議の対象となっている。結果は明らかではないが、地下神人との身分の違いを訴え、社務家や神官家同様に紀氏を名乗り、石清水の仏神事を統率する階層を構成していた。

（二）寛永の遷宮儀式と神楽座神人

現在国宝に指定されている石清水八幡宮本殿等は、三代將軍徳川家光によって造営されたが、仮遷宮は寛永八年（一六三一）十二月二十一日、正遷宮は寛永十一年（一六三四）八月二十三日である。その正遷宮の前日の八月二十二日付けの文書が、83（史料25）である。

遷宮の下行米は、惣権一には十五石、神楽座には四石五斗、御神楽

料は、別に二十四石とおおむね決まっていた。⁽¹²⁾寛永度の造営で下遷宮・正遷宮合わせて二十四石が下行米の先例となったようで、神楽座の下行米は神楽銭ともよばれていた。下遷宮時に三石を雑作料（さうさりや分）として受け取ったが、下遷宮分としての十二石分は渡されなかったという。

ここで、遷宮料不払いをめぐって新善法寺と田中家の争論があるのでみておこう。⁽¹³⁾寛永十二年新善法寺常清から京都所司代板倉周防重宗に対して訴えがあった。慶長度豊臣家造営時には遷宮料は千石であったが、このたび公儀より下された遷宮料二千石は、当時から増額されているにもかかわらず、諸役神人に渡らず最良の神人へのみ下行し、加増に相応の祈祷はできないと諸神人が嘆いている。また江戸逗留や尾張・大垣等への諸費用も遷宮料から捻出し、田中家の恣にしているという。

それに対して、田中家からの主張は、下遷宮については、寛永八年十二月に行われ、その当時は前社務の善法寺幸清が取り仕切り、田中家は関わっていない。訴えられた田中敬清は、寛永九年八月に社務に就任し、正遷宮は旧例に則り神人に下行している。この度の下行米は神人から受取と交換で渡し帳面に記入し不正はない。江戸下向料も新善法寺家から、三家まとめて勘定するよう申出に従ったという。善法寺幸清は、寛永十年に亡くなり、下遷宮の八か月後に田中家が社務就任したものの、下遷宮費用の分配不履行のままであった。この争論にあるように神楽座神人は下行米未支給の被害者であった。

本文書の内容にもどると、正遷宮の神楽銭十二石は受け取り、その

うち二石五斗分を京の楽人五人に支払うのであるが、一石につき三二匁九分で銀換算し、楽人へ八二匁二分を渡し、差し引くと三〇九匁六分である。惣ノ市の取り分一六四匁を差し引いた残りの一四五匁五分六厘が神楽座中分である。この額を惣ノ市から神楽座後大夫に報告しているのである。正下遷宮に行われる神楽にたいして、神楽料二十四石は、神楽座神人と神子で配分されるものであったことが分かる。

(三) 安居神楽と神楽座の役割

「安居神楽覚帳」94(史料27)は、宝永二年(一七〇五)に小林仁左衛門が扣として書き留めたものであるが、石清水の神楽には初卯之神楽・遷宮儀式での神楽等の他に安居神楽があった。「楽家録」巻一第卅安居神楽説では、「安居神楽於男山八幡有之、号安居者十二月朔日至十五日有潔斎人、名之号安居当人^{詳未知之}所謂当人執行之故、有安居神楽之名所修之次第如内侍所也、略定时自庭燎以早韓神終、而奏其駒也、而宮巡其法举之前書矣」とある。十二月朔日から十五日に行われる安居神事の頭役が執行する神楽ゆえにその名があり、内侍所の神楽と同様であるという。その次第については検討の余地がある。後述するように内侍所御神楽など宮廷の神楽では女性神子の奉仕はなく、神子の奉仕は、石清水の初卯二季の御神楽の特徴である。

〈史料27〉の冒頭を示すと次の通りである。

米よせ^ハ一ろう所^ニ面

晩めし有座中

近世石清水地下神人神楽座の諸様相

一、米三石三斗也

一、六斗八升 惣市

一、式斗三升一合 権之市

一、壹斗九升一合 二殿

一、壹斗九升一合 三殿

一、壹斗九升一合 せん殿

一、四升一合 おすゑ

一、六升式合 ちく

一、六升式合 さうく前

右八人前

一石六斗四升九合

安居神楽では惣市・権之市等以下八人前の配分米が示され、ここに掲げる神子たちが奉仕していた。

中世の石清水初卯の神楽では、女性神子が奉仕する巫女の歌舞が行われていた。巫女の歌舞は、内侍所御神楽や賀茂臨時祭の還立の神楽など宮廷の御神楽では行われない、石清水神楽の特色である。長禄四年(一四六〇)初卯二季御神楽では神楽色目、上品・中・下の別があっても八人の巫女の奉仕はあった。「八幡愚童訓」では、八人の御子と五人の楽人の奉仕があつたとされ、五人の神楽男と八人の御子即ち「八乙女」で構成されたが、この人数は必ずしも守られるものではなかったとされている。¹⁴⁾しかし、ここにある惣市以下八人の支出は、この八乙女が想起される。「楽家録」では安居神楽は内侍所神楽と同様と

いうが、この点ではむしろ初卯の御神楽に近似するかもしれない。近世安居神楽の神子舞は、惣市が率いる八人の神子によって演じられ、おそらく中世以来の石清水の神子舞を継承したものではなからうか。

晩めし一ろう

あさめしハ惣市

樂人をふるまい申候

只今ハふるまい代

銀二而參 京樂人へ

明日あさめし代

一、銀壹枚 惣之市方々出

神楽座の一膳の居宅に米を集め、そこで座中は夜に行われる神楽に備えて、夕飯をとる。樂人は、晩飯は神楽座一膳宅にて、翌朝は惣市にて振る舞われることになっていたが、只今は、翌朝の樂人への振舞代銀を出して済ましている。振舞席には出ずに早々に樂人は帰京していた。

さらに〈史料27〉をみて行くと京から招いた樂人への神楽錢六斗は神楽座一膳から渡されるのだが、駕籠錢は、三分の二は惣市が、三分の一は一膳が分担し、樂人が宿泊する宿に対する札錢も両者から出していた。樂人（おそらく人長）が舞う時に手にする榊は、三本を結わえて御幣を付けたものを前日に必要な数を用意し、一膳は当日神楽の演奏最中に樂人に渡るように準備をする。神楽が終わって翌朝は惣市

にて、座中への振舞が行われる。直会を意味するのだろうか、この振舞には一膳の子供のみが交じることが許されている。

神楽座一膳宅にて、京から招いた樂人に晩飯を振舞うこと、翌朝は、惣市が樂人を振舞い、宿への礼銀、舞人が手にする榊の準備など神楽座一膳が取り仕切る役務が記録されている。神楽座神人が実際に樂器を携えて演奏するのではなく、樂人・舞人を招き食事や宿泊等の世話や諸道具・礼銀の準備等がその役務であった。

（四）安居神楽の執行日と祭主

先に見た「樂家禄」では安居神楽は、安居神事の十二月にあわせて行われたかのように記されている。この「安居神楽覚帳」94の日付は宝永二年（一七〇五）二月二日である。果たして安居神楽はいつ行われるのであろうか。「日次紀事」⁽¹⁵⁾によると「石清水八幡宮安居神楽 樂人参向而勤之」とあり、「卷之臨時部」に記載され、毎年定まった月日に行われるものではないようである。

「安居御神事諸事記」⁽¹⁶⁾には、安居神事の頭人が九月に差定を受けた後、三年間の潔斎や各種の祭祀が日を追って記され、十二月朔日に神事に入り「同十五日宝樹猪鼻坂為曳上、頭人一家同役之神人等致参拜、至翌年安居御神楽執行仕候、以上」と結ばれている。すなわち、十二月十五日の宝樹を男山の猪鼻坂へ引上げ、宝樹の枝を切り落としか家に迎えて参拝し、その翌年に安居神楽を執行して神事は無事完了した事になる。「安居神楽ハ宿願成就之報賽ノ為ニ行ヒ来ルナラント或人云」とあるように、安居神楽は、頭人が神事の満願成就の御礼として神前

に奉納するものであった。

ここでもう一度「安居神楽覚帳」を見てみよう。

宝永七年

とら之

十一月すへ卯日

み神楽之あくる日

あんこ神楽参

かたおか蔵之助

同 五郎右衛門

御神楽九郎右衛門其外

右相済

谷村弥七郎

柏村左兵衛

能村主計

これ三ツ

九兵衛

しよじ之米はらい

五ツノ内四分六分^二はらい

座中へ

しよじのふるまいハ座中

後之一らうやく

京楽人ふるまい銀

両方四分六分

右五ツ之付三ツハ六分しよじ

二ツハ四分しよじ

宝永七寅年「十一月すへ卯日」の御神楽のあくる日に安居神楽に参勤したとある。ここで石清水の御神楽と安居神楽の開催日を考察するために、「安居御神事諸事記」の記述を中心に安居神楽開催日を抽出し、その日の干支を「表2」（二八一頁）にまとめた。表では宝永七年末卯之日は二十五日であり、二十四日の明くる日が卯日で、諸事記の開催の日付とは前後するので、いずれか日付の誤記であろう。しかし安居神楽開催の日は、享保十四年以降の五度すべては卯日の辰日である。とすると恒例の初卯の御神楽に相前後して安居神楽を奉納していたといえる。

安居神楽覚帳に名を記す「かたおか（片岡）蔵之助」と「同五郎右衛門」は、宝永二年（一七〇五）、翌同三年に安居頭役を勤めている。「御神楽九郎右衛門」は、神楽座の小林九郎右衛門であろう。「谷村弥七郎・柏村左兵衛・能村主計」の三名は同四年・同五年・同六年の安居頭役である。⁽⁷⁾「しよじ之米はらい 五ツノ内四分六分^二はらい」とあり、諸費用にかかる米での支払いは、四分六で案分する。この五ツの内が何を差すか不明であるが、宝永二年から同六年までの安居頭役を勤めたこの五名であるとする、片岡内蔵助・同五郎右衛門が四分、谷村・柏村・能村の六分で、各人均等に負担することになる。すでに頭役を勤めた五名が宝永七年にまとめて安居神楽を主催し、その費用

を分担し、恒例の石清水八幡宮の初卯の御神楽の翌日に安居神楽を奉納したと解釈できる。「京楽人ふるまい銀」が同様に四分六で負担されていることから初卯御神楽で京より招いた楽人をそのまま翌日まで留置き、安居神楽で楽奏させたと考えてよさそうである。

先に見た「安居御神事諸事記」には享保二十一年（一七三六）二月十六日に執行した神楽の座列の図がある。舞殿西ノ柱ノ内に、高麗縁の畳四枚を敷き、そこに享保十五年に頭役を勤めた谷村右京⁽⁸⁾をはじめ松田助治郎・山田猪左衛門・奥勝右衛門等十一名が記載されている。そのうち松田綱次郎等四名は、一段控えて記され、頭人と共に神事に勤仕する若頭人か或いは相伴する供の者であつたかもしれない。とするとこの時の頭役は七名である。この図の上部に「頭人ノ人数五六人ノ時ハ畳三畳也、此度ハ四畳敷」と注記され、安居神楽は複数の頭人で執行されていたことは明らかである。

安永期から天明期にかけて、安居神楽での本頭神人と脇頭神人の席次争論がおこっている。安居神事は、「朝家第一之御祈祷宮寺無双大栄也、因茲始自宮祠官所司神官神人等至于神領預所庄官百姓住民令勤仕此頭者例也」とあり神領内の神官神人から百姓住民に至るまで身分を越えて頭役が差定される。とりわけ安居本頭神人と脇頭神人は、神事中の「小こならし」・「口明き」だけでなく、家督相続・養子披露等の場面でたびたび着座位置が争われてきた。⁽⁹⁾脇頭神人は、比較的新しく八幡に移住し姓を持たない者が多いが、年月を経て次第に朱印地を集積し社士として成長する者があつた。そうした脇頭人が安居神事の頭役を勤めることになるのであるが、毎年安居頭役を勤め終えた本・

脇の身分の違う祭主たちが神楽の場面に同席することから起こった争論と考えるとよい。

安居神事の期間中は「郷のこなし」「町のこなし」「百姓のこなし」等の振る舞いが行われ、こうした様々な饗宴は祭主家に多大な出費を強いていた。そのうえ神楽が終わった後にも饗宴は続いていた。「神楽ノ翌日頭人各々ソノ町ノ傍輩衆并ニソノ新族等ヲ招請シ、饗応シ竟宴ノ儀アリテ、昔ハ頭人ノ家々賑々シカリシカ、元禄丙子儉約ノ定帳ヨリ以後コノ儀ナシ」とあり、安居神楽の翌日には、その町の旁輩や親族を招き饗応する直会の儀が賑やかに頭人宅で行われていたが、儉約の規定によって元禄九年以降は取りやめになった。検地が行われないう石清水神領において、朱印地所持者が蓄積する富を放出し、社務家を頂点にした神人支配の体制を維持するシステムが安居の神事であつた。それが元禄の社領改に見られるように、売買するはずのない朱印地が神人株と共に転々と移動していた。石清水の行政の中核的存在であり、頭役を代々勤める社士家の存続をはかり、身分構成を維持するために、安居神事は、儉約・簡素化に向かつていた。神事本体の儀式が終わると、安居神楽に限っては頭人勤仕をすでに終えた複数名が共同で費用分担して数年に一度奉納した。開催の日には八幡宮恒例の初卯御神楽の翌日に行うことで、召請する楽人等、恒例の御神楽に準じた次第で執行することが可能となった。

二、神楽座神人の生業と諸活動

(一) 神楽座神人の生業

万治二年（一六五九）柴座町の旅籠屋惣兵衛の訴えに対し、壇所町の町年寄小林市左衛門が奉行所に提出した返答書35（史料9）がある。三ヶ条にまとめられた内容を追っていく。まず一つは、旅籠屋惣兵衛は、元壇所町の与兵衛の次男で、三十年前神楽座に入り、十七年前に旅籠屋惣兵衛に養子に入り同家を相続した。六年前に三郎左衛門死去により神楽座に空席ができ、惣兵衛に神楽座出仕を申し入れたが、他家を相続し人が往来する宿で汚れた合火を扱う商売故に神前への出仕はできないと断った。三郎左衛門の空き座には今の三郎左衛門が勤め、惣兵衛の親が存生中にも神楽座の勤めはしていない。

次に惣兵衛が主張する難題についてである。せがれ九郎右衛門とは、与兵衛の長男で惣兵衛の兄であろう、落ちかかりとあり、長男家が衰退しているのであろう、この九郎右衛門と同様に惣兵衛も無理に出仕を命じると、神楽銭の分配をめぐって両者が争論をおこす恐れがある。それを避けるため、座中から市殿に神楽銭を一時預け置き、訴訟を起こす予定であったが、神楽銭を着服していると訴えられ迷惑している。最後に惣兵衛は、本座なみに市殿へ五節句の作法を行っていると主張しているが、五節句は誰が参ろうとも盃を出すものであり、盃を盾にして我儘を言い募っている。ここで本座なみとは、元から神楽座にある者に対して、脇座・新座と称し、後から株買得によって入座した者であろう。この九月の節句に本座ではない惣兵衛には盃は出していない。市殿より使者が来て惣兵衛を差向けないように申入れて来たが、惣兵衛は承引せず理不尽に神前に出かけて、座中迷惑であるという。本文書からは、惣兵衛は神楽座神人の一員であることを頑迷に訴え、

行動する姿が浮上する。

惣兵衛は、他家を相続し、当初は神楽座出仕を俗人の飲食を用意する旅籠商売が汚れた合火を扱うことを理由に神楽座出仕を断っていた。ところが本家が衰退するのに乗じて、石清水の神人身分の権威を商売に利用しようと我意を主張しだす。日常的に合火を扱う商売であることが神前奉仕の可否を厳格に分別するのではなく、排除の理由に時に応じて利用しているのである。延宝六年（一六七八）御神楽の楽人の宿舎は、山下の巢林庵だが、神楽座勤仕を主張するのは、自ら経営する旅籠を楽人またはその供の者の宿泊所に望んだか、集客に利用する目論見だろうか。神楽座神人は、惣兵衛のように山下の諸商売の町人・百姓によって構成され、楽人の接遇・準備等を担っていた。

（二）神拝作法伝授と検知

神道に分類した文書のなかに神楽座神人が八幡宮の神前で正式な神拝作法を伝授されたものがある。13（史料1）は慶安二年（一六四九）宮守神人伴久金から神楽座の九郎右衛門尉に伝授したものである。伴久金は、「八幡宮筆記」²⁰⁾の巻末に示されるように、同年二月二十八日に邸内に鎮守社を設け、八幡宮三神及び武内社を勧請し、神道奉祭が許されている。伴家は早くから吉田神道に出入りし、とりわけ久金は、寛永十八年（一六四一）から正保三年（一六四六）にかけて寿仙庵玄昌法橋から「唯一神道壇場莊嚴図」「神道根元集并深秘之書」等数巻を授けられ、吉田神道の正統な系譜に名を連ねていた。慶安三年の「御広間雜記」にも、伴家から吉田家へ歳暮の贈答が記され、吉田本家と

の師弟関係は成立していた。⁽²¹⁾ 吉田神道の作法は、同じ七座組のうちの宮守神人伴久金を経て神楽座の九郎右衛門尉に伝授されていた。ところがその後は延宝四年（一六七六）14（史料2）と15（史料3）の宝暦八年（一七五八）には、それぞれ2・4の補任状を受けた檢知の豊親と豊高より神拝作法を伝授されている。

京都田辺市松井の袖旗神人松井家文書から神拝作法を抽出すると、延宝四年石清水神官紀宿祢豊親、宝永七年（一七一〇）には石清水神官檢知紀公豊、寛延元年（一七四八）石清水神官檢知紀豊高からそれぞれ伝授されている。⁽²²⁾ いずれも延宝四年以降は、同様に神拝作法を石清水八幡宮の神官紀氏から受けている。御広間雜記をみると延宝二年（一六七四）十一月には、石清水神官紀斎が吉田家を訪問し、以降吉田と直接関係を築き、同四年三月初卯御神楽再興を準備したものであったと見られる。伴家のように個別に吉田家へ入門した神人を排除して、補任状により神事奉仕の神人身分を付与する役職である檢知が神拝作法をも伝授することで、神官紀氏によって神事系神人を統率し、組織化していく過程と位置づけられよう。

（三）壇所町の町年寄として

安居頭役を拝命した神人家に安居合力米が支給されるのであるが、毎年十一月に神領神人・住人の所持高に応じて安居神事の費用を拠出するのが「安居石打」である。郷中各町から集約して正明寺へ持参し、そこから五十石を安居合力米として、その年の安居頭役に郷中より助成される。

そもそも安居神事は、八幡に居住する者が安居神事執行のために慶長五年（一六〇〇）家康朱印状を以て朱印地を給されたものであり、神領内に田地を所持しながら他所へ居住することは勿論の事、他所に居住する者が八幡の田地を買得することも禁じられている。慶長十五年に橋本町落合忠右衛門の高四十二石二斗六合、紺座町片岡道二の高四十二石六斗五升四合の闕所分が発覚し、その他に田中町をはじめ森・柴座・紺座・園・山路・科手・生津等の落地も合わせて百二十八石七斗六升一合の闕所分が橋本次郎左衛門吉正により、「安居田納帳」に取り調べ書き上げられている。⁽²³⁾ そのなかには田中町甚吉分の朱印地が含まれていた。この朱印状は、焼失分十七通の朱印状のうちの一通にあたり、貞享のころには、京の商人で大仏朱雀町丹波屋五郎左衛門の所の半平が所持しており、半平の曾祖父が八幡に居住していた時に家康より頂戴したものであったという。発給時の慶長五年から同十五年の取調までの十年間に、田中甚吉宛ての朱印状は神領外へ持ち出され、その朱印地は闕所分として安居田納帳に書き上げられた。柴座町万好宛の朱印状も貞享の頃には山科厨子奥村百姓三郎右衛門の所持が確認されている。⁽²⁴⁾ この二例は神領外に朱印状の所在が確認できる事例であり、朱印状所持者であっても、神領外に移住することは、かなり頻繁に行われていた。すべての朱印地が朱印状によって固定されたものではなく、人の移動や売買によって流動的であった。

安居田納帳に記録された百三十石ほどの落ち地は、慶長十六年から三ヶ年の間、郷年寄から安居神楽料として安居頭人に渡されることになった。その後、豊蔵坊が公儀へ願い出て、豊蔵坊の寺領として払い

下げられ、一部は、社務料に収納された。右の落ち地のうち生津・柴座・園町等の十三口の田地は惣高およそ五十石余あり、これが寛永十年（一六三三）に安居田に設定された。これ以後毎年安居合力米五十石が頭人に助成されるようになったのである。ところが寛永二十年の安居田は、五十石二斗七升九合五合であつたが、寛文六年（一六六六）には四十七石一斗七升八合六勺、宝永五年（一七〇八）には、四十二石六斗五升と次第に目減りしていた。郷中より銀百二十匁が公文所へ、米五石が常盤方へ、米九斗が仕丁へ、この三品は郷年寄より直接各々へ渡される。⁽²⁵⁾ こうした郷年寄から渡さるはずの諸費の不足分は安居田の収納では賄いきれなくなっていた。それゆえに、いつしか神領内の住民に「郷中掛り物」⁽²⁶⁾として費用負担が義務付けられるようになったと考えられる。この郷中掛り物の安居石打とは、安居神事の諸費用に充当するため所持高に応じて課せられるもので、住民と神人とは割合が異なる。41（史料15）により神人は、一石につき六合、住人は九合で、その時の米相場で銀納した。宝暦十年（一七六〇）壇所町では神人・住人合わせて三斗七升五才六を米一石につき四五匁の相場で銀十三匁五分三厘四毛〇二を正明寺に持参するよう郷中より命ぜられる。収納が済むと命令書の裏に受取書と郷中の割印がおさるのである。百貫打については、所持高に、軒別と職人に対しても課せられているが、今は利用目的等を明らかにする史料を持たない。

朱印地を買得ると郷石掛も次の土地所有者に引き継がれる。延享三年（一七四六）38（史料12）は、味右衛門分の高二石三斗二升の安居郷石懸米を壇所町会所へ持参することを河原崎伊織に命じている。

味左衛門とは、壇所町の安居脇頭神人四十一人組の内であり、その味右衛門分の朱印地を河原崎伊織が買得したのであろう。会所で郷石懸米の取りまとめに当たる町年寄の役務に伴って作成された文書である。その他に養子や転居による送り手形や宗旨手形、町定・帯刀人の書上など、壇所町の行政・自治に関係するものがあり、小林家が町の年寄役を勤めていたことを示す文書である。

神領内で毎年九月に行われる宗旨改では、帯刀人調べが同時に行われ、明和二年（一七六五）「帯刀名前之覚」⁴²（史料16）では、小林九郎右衛門・小林治兵衛ほか合わせて九名は、往古よりの帯刀の由緒を持つが、今は神事など公用の時以外は帯刀しないと当職に届けている。文久二年では壇所町年寄は、小林治兵衛が勤めている。⁽²⁷⁾ 石清水山下の各町の自治の代表者は、侍層は「町行司」、社士がいない町では「町年寄」と職名を付されていた。町年寄は、多くが屋号をもつが姓のない町人で、中には仕丁座神人のように姓を持つ下級神人がいた。この小林家も仕丁座と同様であつたと考えられ、本文書群の小林家との直接の関係は明らかではないが、壇所町は、神楽座神人が集住し町政を牽引していた。

（四）壇所町の西福寺

壇所町の東には浄土宗の西福寺があつた。西福寺については『男山考古録』⁽²⁸⁾によると壇所町の清林菴の東に細道があり、園道へ至る「立枯橋」という石橋がかかる。細道を隔てた東に西福寺がある。高四石二斗六合の朱印地を所持する浄土宗三十六ヶ寺組の内、本尊

は毘沙門天像の古像を安置し、護国寺堂内にある増長天像と同寸であることから、護国寺四天王像の一体であると考古録の著者長濱尚次は推定している。台座には延享二年（一七四五）「京大仏工原田喜内再興」の墨書がある。胎内背面にある銘札には「再興施主辻村久右衛門・彦兵衛」⁽²⁰⁾とあり、神楽座の中には、辻村氏もあり、辻村久右衛門は、神楽座神人であるかもしれない。台座名と同時期と考えると、本尊は壇所町の神楽座神人によって修復されたとみてよい。天明六年（二七八六）⁴³（史料17）には、西福寺の毘沙門堂が大破し、建物普請のために頼母子講で資金調達の願書が惣代津国屋治兵衛によって当職に提出された。西福寺毘沙門堂は十八世紀中頃には、壇所町に集住する神楽座神人によって維持管理されていたことがわかる。

十八世紀中頃の景観を描く「石清水八幡宮全図」の壇所部分（二八一頁）をみると、考古録が記すように西福寺が所在し、二間四方の瓦葺の毘沙門堂が確認できるが、今そのあたりは長尾八幡線、バス道路交差点付近である。毘沙門堂は、現在壇所町の浄土宗寺院念佛寺の山門の西脇に、石垣を高く積み上げた上に移転している。堂内の本尊毘沙門天像は、像高およそ一六〇㎝、一木割刳造、古色のどっしりした体躯を持ち、平安時代中期の作という。

明治十一年（一八七八）の念佛寺文書⁽³⁰⁾によると、本堂庫裏など念佛寺の堂宇は明治元年正月戊辰の兵火で悉く焼失、境内には仮建物と毘沙門堂が記されている。西福寺毘沙門堂は戊辰の兵火を免れ、明治十年頃には念佛寺に移転していた。その後西福寺は明治二十五年に廃寺、跡地は田地となった。

おわりに

神楽座神人の史料から、安居神楽や神人の役務を通覧してきた。神子は、石清水の支配層を構成する神官紀氏一族の女性が出仕した。神子は、宮廷の内侍所神楽にはない女神子の歌舞を奉納し、これが石清水の神楽の特徴であり、近世に継承されていた。

神楽座神人は、神楽を奏楽するのではなく、京より招いた楽人の世話を神子と共に行うなど、神楽の裏方的存在であった。日常は、山下の町々で百姓町人として生活し、安居神事にかかる負担金の取りまとめ、宗門改等の様々な調書の提出、壇所町の寺院の維持管理など、壇所町の年寄として行政を担っていた。

指出検地をもとに朱印状が発給され、近世を通して検地が行われなかった神領において、神人の蓄財放出を目的にした安居神事は、神領支配のシステムとして慶長五年より毎年連綿と行われていた。神事の後に奉納される安居神楽はいつから執行されたかは不明だが、安居神事の一環として位置づけられていた。安居神楽は恒例の初卯神楽に合わせて、数年に一度挙行される臨時の祭儀で、神事執行を終えた複数の頭人が祭主となった。祭主には身分が違う本頭・脇頭神人が同席することになり席次争いとなっていた。総体いくつもの饗宴を伴う安居神事は、次第に儉約・負担軽減、簡素化に向かっていった。一方で、石清水独自の御神楽に合わせた安居神楽については、数年間を要しても数人の祭主で体裁を整えられるまで、開催をみあわせていたともいえる。

石清水では、初卯御神楽再興の後に、放生会や臨時祭も復活し、そ

こでも神楽が奉納されるようになる。再興に至る幕府や尾張藩との関わり、朝廷祭祀の復興を目指す天皇の意思は、石清水では実際のよううに受け止められたか、神人組織の構造と合わせて明らかにすることが今後の課題と考える。

【註】

- (1)「楽家録」巻之四十三、年中奏楽目録第十四（『復刻日本古典全集』五オンドemand版、現代思潮新社、二〇〇七年）
- (2)拙稿「近世石清水八幡宮における吉田神道の受容と社務家」（『京都府立大学学術報告』人文第六十八号、二〇一六年）
- (3)拙稿「近世石清水八幡宮の所司発給文書にみる神人身分―六位欄宜森本家旧蔵文書を中心に―」（『京都府立大学学術報告』人文第六十七号、二〇一五年）
- (4)安居神事と家康朱印状については、鍛代敏雄「中近世移行期の石清水八幡宮と幕府・將軍―安居神事をめぐる政治交渉―」（『戦国史研究』第六一号、二〇一一年）。拙稿「石清水八幡宮領における門前町の自治と尾張藩家老志水家」第二節（『尾張藩社会の総合研究』六、清文堂出版、二〇一五年）。大量の朱印状発給と寛文印知の分析については、東昇「近世石清水八幡宮の神人文書と文書認識」（『国文学研究資料館編『アーカイブズの構造認識と編成記述』思文閣出版二〇一四年）ほか。
- (5)石清水八幡宮『石清水八幡宮史』第六輯、七座知行分 八七七頁

- (6)拙稿「近世石清水八幡宮の石高―新史料「八幡宮筆記」を中心に―」（『京都府立総合資料館紀要』三十六号、二〇〇八年、史料翻刻）
- (7)前掲(5)、九〇五頁。朱印状をめぐる度重なる争論をきっかけに、元禄三年社領改で、各自の朱印状の石高と実際の土地売買の状況が取り調べられた。
- (8)前掲(5)、八七六頁

- (9)八幡市教育委員会・石清水八幡宮『石清水八幡宮 諸建造物群調査報告書』本文編、二〇〇七年、第六章資料一〇六頁
- (10)「御神楽着座之次第」石清水八幡宮文書 杉維・二九、石清水八幡宮蔵、（『石清水八幡宮史料叢書』四、四三五頁）
- (11)京都府庁文書、明五・五八・一「土族編入願」、京都府立京都学・歴史館蔵
- (12)前掲(9)
- (13)寛永年中遷宮料之儀争論双方之書付（石清水八幡宮『石清水八幡宮史料叢書』五、造宮・遷宮・回禄、五二七頁）
- (14)『石清水八幡宮史』第三輯春冬二季恒例御神楽、七九八頁。中本真人「中世の御神楽と縁起」（『中世文学』第五十六号、二〇一一年）、同「石清水八幡宮寺の初卯の御神楽に対する一考察」（『藝能』第一七号、通卷四百三十四号、二〇一一年）
- (15)小林茂美「石清水八幡宮の神楽」（『国史大辞典』）「安居神楽」は男山八幡で十二月朔日から十五日まで潔斎する安居当人の執行するもの」としているが、神事期間と神楽執行日は必ずしも

同一ではない。黒川道祐『日次紀事』（愛媛大学）<http://www.lib.ehime-u.ac.jp/HINAMI/12/index.htm>

(16)「安居御神事諸事記」石清水八幡宮文書 御文庫八五（通番一六四四）、石清水八幡宮蔵

(17)「天下安居神事之記」石清水八幡宮文書御文庫B六（通番一六七二）。安居神事は寿永元年（一一八二）源頼朝の命による志水忠国の奉幣神事を由来として、文治二年（一一八六）文保二年（一一三八）、慶長五年（一六〇〇）正徳三年（一七一三）の記録が残る安居頭人名を書き上げている。なお宝永七年の十二月に安居神事の頭人を勤めたのは、谷村吉左衛門である。

(18)「安居合力米之事」「安居頭役差定」「八幡宮寺符」の三点の個人蔵文書により、享保十五年十二月谷村右京藤原光伴の安居頭役勤仕は明らかである。

(19)「八幡市『八幡市誌』第二巻第五編第一章第二節安居祭の復活と八幡地下人、一九八〇年

(20)前掲（6）

(21)前掲（2）

(22)「神拝之作法」1・2・10延宝四年。1・26・0・2寛延元年。

1・26・3宝永七年。（神奈川大学日本常民文化研究所『松井幸信家文書目録』二〇一〇年）

(23)石清水八幡宮御文庫八一（通番一六四〇）「安居田納帳」、石清水八幡宮蔵

(24)「朝野旧聞哀藁」第九卷、東照宮御事蹟、自慶長三年九月至慶長

五年七月、（『内閣文庫所蔵史籍叢刊、特刊第一、汲古書院、一九八三年）

(25)前掲（16）

(26)「永代譲り渡し申す田地之事」文政十年十二月（個人蔵文書）は、土地売買証文の雛型であるが、そこには、巢林庵にたいして本米、後に朱印地を買得した者が支払う修理料、郷中掛り物である安居石打、この三つの負担が朱印地買得者には毎年義務付けられ、修理料と郷中掛り物は町会所で取りまとめのうえ正明寺へ納められることが示されている。

(27)前掲（4）、拙稿「石清水八幡宮領における門前自治と尾張藩家老志水家」、四四八頁、別表2「門前自治役職名一覧」

(28)長濱尚次「男山考古録」（石清水八幡宮『石清水八幡宮史料叢書』一、続群書類従完成会、一九九四年）

(29)念佛寺住職福井純史氏のご教示による。西福寺については森本信富「森之町及旦所町古考録」大正九年、念佛寺蔵によった。

(30)「實際取調書」明治十一年八月、念佛寺文書88、念佛寺蔵

石清水八幡宮研究所鍛代敏雄・西中道両氏には、特例として史料閲覧の便宜を、また京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター所長渡辺信一郎氏にご助言をいただいた。なお、古文書目録・翻刻史料は「地域史料研究会やわた」の諸氏との協同作業による成果である。そのほかお名前を揚げられなかった多くの方々のご助力を得た。末筆ながらここに謝意を表す。

〔表 1〕 分類項目別点数

| 分類項目 | 点数 |
|------|----|
| 補任状 | 12 |
| 神楽座 | 12 |
| 神道 | 9 |
| 町年寄役 | 13 |
| 西福寺 | 3 |
| 講 | 7 |
| 諸勘定 | 9 |
| 貸借 | 15 |
| 個人 | 9 |
| その他 | 5 |
| 計 | 94 |

石清水八幡宮全図
壇所町部分図
(京都府立京都学・歴彩館蔵
京の記憶アーカイブより作成



〔表 2〕 安居神楽催行日の干支

| 安居神楽開催日 | 干支 | 備 考 |
|-------------------|----|---------------------------|
| 寛永元年(1624)11月23日 | 甲戌 | 11/4 乙卯、11/16 丁卯、11/28 己卯 |
| 宝永7年(1710)11月24日 | 甲寅 | 11/25 乙卯 |
| 享保6年(1721)3月15日 | 丙子 | 3/6 丁卯、3/18 己卯 |
| 享保14年(1729)11月10日 | 庚辰 | 11/9 己卯 |
| 享保21年(1736)2月16日 | 庚辰 | 2/15 己卯 |
| 寛保4年(1744)2月8日 | 丙辰 | 2/7 乙卯 |
| 寛延4年(1751)2月12日 | 庚辰 | 2/11 己卯 |
| 宝暦10年(1760)2月5日 | 庚辰 | 2/4 己卯 |

翻刻史料

〔史料1〕【神楽座神人小林家旧蔵文書13】

神拝之作法

先二揖

次三種太祓

〔十宝印〕

吐普 加身 依身 多女

寒言 神尊 利根 陀見

波羅伊玉意 喜餘目出玉

柏手

次祝詞

掛毛畏岐八幡三所大神宮乃

廣前仁恐美恐美毛申弓申

佐久一天安全四海平定別弓者

小林九郎右衛門安穩息災延

命子孫繁榮惡事災難於

除捨弓家内繁昌福祿幸

現世二世如意満足諸願

成就之旨於夜乃守晝乃

護仁守幸給止神樂之神人

小林九郎右衛門尉重吉恐美恐美毛申春

次柏手

次一揖

退散

以上

慶安貳年

今月吉辰

宮守太夫大伴宿祢久金

九郎右衛門尉殿

〔史料2〕【神楽座神人小林家旧蔵文書14】

神拝之作法

先鳥居勤行

左立一揖 身曾貴太祓

神詠

ちはやふるわか心よりするわさを
いつれの神かよそに見るへき

次沓掛 呪文曰 前朱雀

次座掛 同 後玄武

次二拝 同 左青龍 右白虎

次身曾貴太祓一座

〔根本印〕
次中臣祓 一座

次三種太祓 十二座 〔有口伝〕

次柏手 小大 一一

次祝詞

次柏手 大小 二

次二拝 座揖 沓揖 呪文同前

退散 タイサン 以上

神官紀宿祢

延宝四曆正月十五日 豊親（印）

神拝之次第

先左立 一揖

次三種太祓 一座 口伝

次柏手 小大 二

次祝詞

次柏手 大小 二 次一揖

以上

丙辰 年正月十五日 豊親（印）

〈史料3〉【神楽座神人小林家旧蔵文書16】

永代かい申作敷之事

壺所^ハ字はん^{（番賀）}か、壺石二斗舛^ハ地子舛也、同六升、本やく其方様へ出申候め^{（免役カ）}んやい之儀^ハ、天下壺とうひ^{（一統干損水損）}そん水^{（損）}そん之時ハ、たちみ可仕候、右之下地丁銀子六百目永代かい申候壺石二斗懸物、まい年

出可申候、右之下地年貢不^{（無沙汰）}さた 仕候へハ、

永代此方へしん^{（進退）}たい被返候事、仍^{（而）}状

右之下地永代其方作敷にて候（花押）

如件

能村二郎左衛門尉

（花押）

正保四年極月廿五日 小林九郎右衛門尉

参

〈史料4〉【神楽座神人小林家旧蔵文書17】

本物借状之事

合銀子五百拾匁借用申所実正明白也、此質物^ニ代々家^ニ相伝^リ候、御神楽座之知行八斗四升七合之所書入申候、此百姓作人戸津村仁右衛門と申者^ニ而候、右之知行永代其方へ可被相納候、自今以後違乱妨申間敷候、何時^ニ而も本銀調法いたし借銀相立候ハ、右之知行無相違此方へ取返^シ申約束^ニ候、仍本物借状如件

寛文拾年 かり主 九郎右衛門（印）

戊ノ十二月一日 口入 孫左衛門（印）

玄證房参 使 久右衛門（印）

〈史料5〉【神楽座神人小林家旧蔵文書18】

本物借状之事

合銀子七百目借用申所実正也、右之質物^ニ某代々家^ニ相伝^リ候御神楽座之知行壺石壺斗六升六合之所証文^ニ書入申候、此百姓作人ハ

後日借用一札仍^而如件

二階堂村左小と申者^{ニ而}候、右之知行永代其方へ可被相納候、自今以後違乱妨申間敷候、若何時^{ニ而}も本銀調法いたし候^而借銀相立候ハ、右之知行無相違此方へ取返^シ申約束^ニ候、仍^而本物借状如件

借用人

慶応元^丑年十二月

松屋清兵衛（印）

寛文拾年

九郎右衛門（印）

戊ノ十二月一日

口入 孫左衛門（印）

玄證房 参

使 久右衛門（印）

西福寺

御世話方中

塩屋勘兵衛（印）

〈史料6〉【神楽座神人小林家旧蔵文書19】

讓状之事

一、其方親九郎右衛門殿手前より 御神楽座之知行高式石八斗之所、此納式石壹升也、此知行本物^ニ此方^江我等買得仕候、則知行売券状^ニ此証文ヲ相添其方へ永代讓申候間、無恙所務可致候者也、仍如件

元禄三^庚年

増 祐 （印）

六月二日

九郎右衛門（印）

仁右衛門 参

〈史料7〉【神楽座神人小林家旧蔵文書27】

借用申銀子之事

一、銀式貫目也 利足月九匁、

右者西福寺修覆銀、此度無抛要用^ニ付、借用申処実正明白也、銀子返済之儀^者来^ル寅十二月十五日限、元利共取揃急度皆済可仕候、万一济方相滞候得^者印形者より相弁、聊御損難相掛申間敷候、為

〈史料8〉【神楽座神人小林家旧蔵文書34】

日^{（説ふカ）}のとうわふう

銀子合百三拾目

斗米ノ算用ニ
わひ事仕渡リ申候

又京^{（衆）}かく衆へ座付と申五□□（百文力）

とう屋からいて申候

惣市大夫兩人わぶう

合七拾九匁四分 惣市分

合五拾目六分 大夫分

右之内仕丁衆へ壹石取申由申候を

これもと^{（出）}り分いて申候、わすれ候て兩人

して、わきまへわたし申候

七匁 惣市^{（出）}分いて申候

五匁 大夫^{（出）}分いて申候

壹石ハ京衆へ<sup>惣市 兩人中分
太夫 のほぜ申候</sup>

寛永四年十一月四日

〈史料9〉【神楽座神人小林家旧蔵文書35】

乍恐返答仕候

一、柴之座之町はたごや惣兵衛目安差上申候^ニ付、御裏書頂戴仕候、全我等押領仕義^ニ無御座候、則惣兵衛義^ハ檀所之町与右衛門次男^ニ而三十年以前^ニ御神楽座へ座入仕候処、紛無御座候、然とも十七年以前^ニはたごや惣兵衛と申もの、所へ養子^ニ参候^而、他之家をつぎ、はたごやを仕罷有候、就其六年以前^ニ三郎左衛門相果申候時、座のあき御座候^ニ付、惣兵衛座へ出可申と申候へとも、他之家をつぎ殊^ニ往来之宿を仕候へ^ハ、けかれたる相火^{（合火）}をもむさとましわり申商売仕候故、御神前へ出申義なり不申候^ニ付、三郎左衛門あとへ^ハ今之三郎左衛門出申候、且今惣兵衛出可申もの^ニ而御座候ハ、六年以前殊^ニおや存生之時出可申処^ニ其時さへ出し不申候を、又候哉かやう成よこしまを申上候御事

一、我等へ難題を申掛^ケ候義^ハせかれ九郎右衛門落懸りにて、御神前へ致出仕候へ^ハ、出まじき惣兵衛も致出仕御神楽^{（マツ）}之参候へ^ハむりに役を仕申候、其上神楽錢わけ口を九郎右衛門取可申ふんを惣兵衛取可申と神前^ニ而致相論^{（うかがひ）}を候^ニ付、論をやめ可申ために座中の一殿へ尔今預^ケ置御座候、内々^ハ此方御訴訟可申上と奉存候処^ニ返答^ニ罷成我等を相手之やうに申上候へ^而、何ともめいわく仕候御事

一、惣兵衛ほん座なみに一殿^ハ五節句之作法仕候様^ニ申上候へとも、一切左様之儀^ニハ無御座候、五節句などに^ハ誰^ニかきらす礼に参候へ^ハ盃を出しさし被申候、かやうの義をかうにたて我まゝを申候

故、当九月之節句^ニも礼^ニ参候へとも惣兵衛^ニハ盃をさし不被申候、其上一殿^ハ度々以使出申間敷と被申候へ共、何事も承引不仕理不尽^ニ出申候、兎角他之家をつぎけかれたる商売仕候もの、此座へ出申義何とも座中めいわく仕候御事

右之趣一殿并座中被為召出被為聞召分

被下候ハ、難有可奉存候、以上

万治^亥三年十二月六日 壇所町 小林市左衛門（印）

御奉行様

〈史料10〉【神楽座神人小林家旧蔵文書36】

御神楽下行

一、米三石三斗 壺ッ前

内役人へ渡し前

一、六斗 京楽人へ

六斗八升 惣ノ市殿

式斗三升壺合 権ノ市殿

壺斗九升壺合 二殿

壺斗九升壺合 三殿

壺斗九升壺合 せん殿

四升壺合 おすへ

六升式合 ちくへ

六升式合 さうく前

八口メ

壺石六斗四升九合

五升五合 両庵へ志ゆ行

六升三合 仕丁

四升五合 かうたう

四升五合 三くわ

四升五合 ふしやう

四升五合 ふしやう

五合 馬

七口メ

三斗壺合

七斗五升 大夫取分

右惣合三石三斗

是ハ右かくら壺座分

諸役人下行配分

延宝三年（二年の誤記カ）

寅ノ

十一月吉日

〈史料11〉【神樂座神人小林家旧蔵文書37】

神役之書上ケ

一、高式石八斗

神樂座神人

勾当太夫

御代々様御朱印奉頂戴候

石清水八幡宮於御神前ニ天下御安全之

御神樂年中相勤申候、以上

正徳元年七月十七日 小林仁右衛門

御奉行様

〈史料12〉【神樂座神人小林家旧蔵文書38】

高二石三斗式升

一字、高 壺石

一字、高 九斗二升

一字、地子 高 四斗

合式石三斗二升也

右味右衛門分郷石掛之田地也、壇所之町会所へ出申候、
当年々其元々会所へ御出シ可被成候、以上

小林 誰

延享三 丙 寅年

九月

小林九郎右衛門

河原崎伊織殿

〈史料13〉【神樂座神人小林家旧蔵文書39】

覚

一、従往古神職上座之家ハ京都寄役火事役ニハ不出申、下座之百姓出

勤候所、此度当役年寄辻村仁兵衛・同久左衛門兩人同心ニテ古法

ヲやぶり京役ニ上座ヲ出シ候与申、則小林九郎右衛門・河村惣十

郎兩人出不申、年寄兩人与口論致候得者、町中式拾軒余之下座之

者^与年寄兩人同心^{ニテ}神職家^江向後下役致さセ申度候^与、下座之百姓^ニ一統^{ニ而}正月廿七日^ニ御当職様^江御願^ニ百姓罷出候所、同廿九日^ニ檀所之町年寄神職式三人罷可出候^与御差紙来り候処、年寄辻村仁兵衛・小林九郎右衛門・河村惣十郎三人^江御当職様^江罷出御役人片岡頼母様被仰候様^ハ、此度百姓之願其意不得候間、様子有候かと被仰候所、小林九郎右衛門^与河村惣十郎兩人神職家^ハ往古^今下役^ニ出不申候所まされ無御座候段、壇所之町・根元町儀つまひらか^ニ申上候故、御役人御聞届^ケ被成、古法古来之通急度相守^リ地役たり共下役^ハ百姓下座百姓^ヲ可出候、神職人^ハ相応之役可致候^与年寄辻村仁兵衛^ニ百姓之願書御戻^シ被成御当職之仰^{ニテ}候^与、百姓共^ニ急度申可付候、上座^も下座^も古法之通向後急度相守^リ候段被仰付候、為後日相違無御座候、以上

延享四^卯年正月

小林九十郎 (印)
河村惣十郎 (印)
小林市左衛門 (印)
辻村左兵衛 (印)
小林九郎右衛門 (印)
沢四郎左衛門 (印)
河村五兵衛 (印)

一、餅 壹重 但^シ三升を二ツ取
一、すゞ かたし 但^シ五合入
右之通座中^江賦^リ可被申事
一、仲^ケ間座入之儀是迄^者振舞いたし候得共時節悪敷候故、向後儉約を相守^リ振舞之儀向後互^ニ相止メ可申事
一、親子座入相済候共、右之通為持可遣事
右之条々相定遣し候上^者、堅^ク可被相守者也
宝曆八寅年二月 (ママ) 三官大夫

〈史料15〉【神楽座神人小林家旧蔵文書41】

安居石打

神人六合
住人九合
米相場四拾五匁

一^{神人}、高貳拾三石八斗四升
一^{住人}、此米壹斗四升三合〇四才
一^{住人}、高拾七石五斗貳升四合
此米壹斗五升七合七勺才六
二口合米三斗〇〇七勺五才六
此銀拾三匁五分三厘四毛〇貳
右之銀来^ル廿八日正明寺江可有持参候、以上
宝曆十庚辰年十一月 郷中 (印)

〈史料14〉【神楽座神人小林家旧蔵文書40】

神楽座入之定書

(裏書)

「表書之通受取候者也」

石^ニ壹匁八分

百貫打家^ニ三匁

錢壹匁^ニ六拾四文

一、高四拾壹石三斗六升四合

此銀七拾四匁四分五厘五毛貳

一、家拾四軒半

此銀四拾三匁五分

一、職人貳人

此米壹升

此銀四分五厘

三口合銀百拾八匁四分〇五毛貳

右之銀来^ル廿八日正明寺へ可有持参候、以上

宝曆十庚辰年十一月

郷中(印)

檀所町

(裏書)

「表書之通受取候者也」

〈史料16〉【神楽座神人小林家旧蔵文書42】

帶刀名前之覚

小林九郎右衛門

(印)

辻村佐兵衛 (印)

小林市左衛門 (印)

辻村仁兵衛

辻村孫左衛門 (印)

小林治兵衛 (印)

小林三郎左衛門 (印)

上嶋与兵衛 (印)

上嶋七郎兵衛 (印)

右之者共從往古帶刀仕来^リ候得共、身上不如意^ニ付當時

帶刀不仕候、併御神事公用之節^者帶刀仕候、以上

辻村仁兵衛 (印)

明和二年酉九月 小林九郎右衛門 (印)

辻村佐兵衛 (印)

御当職様

御役人中様

〈史料17〉【神楽座神人小林家旧蔵文書43】

乍恐御願奉申上口上覚

一、当町内西福寺毘沙門堂及大破、甚難洪仕罷在候得共、近年打続困

窮之時節^与申、一向普請等仕候儀難及、自力講中打寄色々相談も

仕候得共致方無御座、依之此度他力助情取逃^(マ)、頼母子相勤申度

奉存候^ニ付、向論月六ヶ度宛相勤申度奉存候、此儀頼母子候得共

此節御穩便中之御事、人寄等仕候儀^ニ御座候故、御届御願奉申上

候、何卒以御慈悲御容許被為成下候ハ、一統難有仕合^ニ奉存候、

以上

天明六年年

講中惣代

霜月十三日

津国屋

治兵衛（印）

御当職様

御役人中様

右之趣御願申上度申候付奥印仕候

壇所町

年寄

辻村仁兵衛（印）

〈史料18〉【神楽座神人小林家旧藏文書45】

定書

此度町内次郎左衛門義、当文化十三年^子九月宗旨印形^ニ付、中御当職様へ宗旨帳面奉差出候処、御役人中様被成御尋候^者、町内次郎左衛門儀是迄名字帶刀書差出候^者神楽座宮守座^ニ候哉、□御尋被成候処、則年寄^中問之者^ニ而^者無之趣申上候処、即刻右次郎左衛門御召被遊、其方は迄名字帶刀書差出候^者格別由緒^モ是有哉御聞札被遊候処、次郎左衛門一言之申分無之、仍^而以後名字帶刀書御差留被仰付、則年寄へも右以来町役之者相心得候様、被仰付奉畏候^而御請申上置候、仍^而当年より宗旨^者平同様^ニ相認奉差上置候以来之処、中ヶ間一統^ニ右被相心得候、右一件^ニ付為心得一書、書残置申候事

文化十三年子九月

小林九郎右衛門殿

〈史料19〉【神楽座神人小林家旧藏文書46】

覚

小林市右衛門（印）
小林九郎右衛門（印）
小林小左衛門（印）
辻村市之助（印）

右宮守神楽座従往古帶刀

仕来候^ニ付、乍恐以書附奉申上候、以上

文政元^寅年九月

年寄
小林九郎右衛門（印）
同
小林市右衛門（印）

御当職様

御役人中様

〈史料20〉【神楽座神人小林家旧藏文書49】

山城国綴喜郡八幡

一、家数式拾八軒
一、寺^ケ寺、尼^ケ寺人

一、人数合百七人

男五拾三人

女五拾四人

右之者当丁人数当^午五月改当年以上

書面之通相違無御座候、以上

文政五^午年六月

壇所之町年寄

小林九郎右衛門

小林小左衛門

御当職様

御役人中

〈史料21〉【神楽座神人小林家旧蔵文書50】

法類請一札

一、今般西福寺無住^ニ付、拙寺法類清壽儀致住職候、然^ル上^者公儀表御

法度^者勿論、宗門如法^ニ為相守可申候、万一当人身上^ニ付異返有之

節^者何時^{ニ而も}法類^江引取其元方^江少^も御苦劳相掛^ケ申間敷、為後日一

札仍^而如件

文政五^午年五月日

下奈良村

正光寺（印）

彈正町

九郎右衛門殿

同所

小左衛門殿

〈史料22〉【神楽座神人小林家旧蔵文書78】

古^キ日記^ヲ以テ^{うつしをくものなり}

参石三斗^ニ付京^ヘ

壹ツニ付

六斗ツ、

か^{（衆）}く人衆

六百八拾文

惣ノ一殿

式百三十一文

元ノ一殿

百九拾壹文

式殿

百九拾壹文

三殿

百九拾壹文

せんしとの

四拾壹文

御すゑ

百廿二文

此内より六拾壹文ツ、御中之物

太夫^ヘ被下候

六拾二文

ちく

六拾二文

さうくまい

六拾二文

此内より三拾壹文ツ、たちかわり

太夫^ヘ被下候

五拾五文

両座^ヘ参

しゆ行

六拾二文

仕丁

貳百七拾七文 太夫

四拾五文 こうたう

四拾五文 さんくわ

四拾五文 ふしやう

四拾五文 ふしやう

五文 馬

〈史料23〉【神楽座神人小林家旧蔵文書81】

合男貳人

一、浄土宗念仏寺（印）
年六十貳才 辻村左兵衛（印）

一、同 同
年五十七才 女房

一、同 同
年廿壹才 女子 ふゆ

合三人内女男貳人

一、浄土宗西福寺無住
留主居 年六十五才 白保（印）

惣家数 三拾貳軒

外寺壺ヶ寺

惣人数 百廿四人

内

〈史料24〉【神楽座神人小林家旧蔵文書82】

神楽済請分 貳石四斗六升四合

一ろとく分

三斗 かく人 一どのより

ゆめし代 ろうさ両

樂人 ろうさ両

三升 伊兵衛より 樂人 ゆめし

五斗ハ京へつかい分 一どのハ被下候

惣合 三石貳斗九升四合

一ろ取候分

か、り物石ニ付壺匁八分五厘

貳石四斗六升四合分

四匁五分五厘二毛

〈史料25〉【神楽座神人小林家旧蔵文書83】

八幡宮下遷宮正遷宮

御神楽せん、（錢）合廿四石

を下遷宮之時三石

（造作料）さうさりや分ニうけ取申候

を、下せん宮之神楽せん

と御申候て、拾二石を御

渡シなく候、正遷宮之

神楽せん拾二石御渡シ

被成候、則此内^{ニ而}二石五斗

京之かくにん^ニ五人へ渡シ

のこり斗^ヲわけ申候、日記

拾式石 万かゝり物引
但石三付三十二匁九分ツ、

此銀子三百九十四匁八分

□三匁

引ノ 三百九十匁八分

此内京之かくにん五人へ

差し引ノ三百九匁六分

此内百六十四文 惣市分

引ノ 百四十五匁五分六リン

御神楽座中分

八月廿二日 惣市（花押）（印）

寛永拾壹年

後大夫参

〈史料26〉【神楽座神人小林家旧蔵文書87】

安居御神楽出勤人数

従四位下 壺岐守

筆築 ひぢりき 安倍季福 アベスエトミヨシ

同 摂津守

本拍 ビヤウ 子 多富 フンヨシ

正五位下 三河守

筆築 安倍季武 スエタケ

同 讃岐守 サヌキ

人長 ニンチャウ

同

近江守

多忠壽 フシタナガヒサ

笛 フエ

従五位上 豊後守

和琴 ハゴン

多久音 ブンオト

同

播磨守

笛

大神景敏 フカガゲトシ

末拍子

正六位下 左近衛将監 ブンノリ

〈史料27〉【神楽座神人小林家旧蔵文書94】

（表紙）

宝永貳年

安居神楽覚帳

西二月一日

米よせハ一ろう所ニ而

晚めし有座中

一、米三石三斗也

一、六斗八升 惣市

一、式斗三升一合 権之市

一、壺斗九升一合 二殿

一、壺斗九升一合 三殿

一、 壹斗九升一合 せん殿

一、 四升一合 おすゑ

一、 六升貳合 ちく

一、 六升貳合 さうく前

右八人前

一 石六斗四升九合

これハ壹石六斗五升内分出

一、 六斗一ろう今京樂人

神樂座中へ出す米覺

壺人前二付

一、 四升五合ツ、四人へ出す

四口合

一、 壹斗八升

山上

一、 五升五合 兩座しゆ行

一、 六升貳壹合 仕丁

一、 五合 座之遣 はらいどう馬

右通神樂壺ツ二付而事

合三斗貳壹合

京樂人へふれ申ハ

一、 一ろうやく也、それゆへ

惣之市かたゝ米壹斗取也

御神樂参る晩

其晩めししやうじ

一、 一ろう所二而座中ふるまい

此覺ハき□而ハ仕立

一、 明日惣之市所座中ふるまい

右ハ市殿一ろうへ 兩方へ

晩めし一ろう

あさめしハ惣市

樂人をふるまい申候

只今ハふるまい代

銀二而参 京樂人へ

明日あさめし代

一、 銀壹枚 惣之市方分出

下る日晚めし代

一、 貳拾五匁 一ろう方分出

京樂人かごせん銀五匁

一、 銀子貳拾壹匁五分

是ハ三ツ壹分 一ろう

三ツ二分 惣之市

右兩人分出

七分市殿三分一ろう出す

今ハ半分懸

御当む様へ茂

札銭出シ

京楽人之やどへ

札銀両方分出シ

楽人まう榊木ハ

へい付而一ろう出す

やたのか、みハ惣ノ市出シ

一日前日今ハ二本

榊木三本ツ、ゆわへて

へい付而とう人之数

何ほどニ而も壺わツ、

楽人ニ渡而楽一也

其晩ニ座付而から

楽人中

神楽中間中

榊木さかき 壺本へい付而

人数有ほど一ろう出す

今ハまいこがたう人榊渡す

けんはい神座分致

わきたう之覚

川口村

一、式石八斗也

内壺石四斗 惣之市

内壺石四斗 一ろう

是ハ市殿分

一、六升五合一ろうへ取

今日取不申候

ふるまい

右之通

右千と後と五と五とな
れハ半分ツ、

安居神楽参

惣之市ニ

明あさめし座中市殿ニ

一らう之子も息参

ふるまい有子共

座入仕而茂 一らう

之子之外ハ不参

一らう之ふるまい参

其外米よせニも

両方へふるまいへ参

右両方之米よせニハ雇入仕候へハ

ふるまい参

宝永七年

とら之

十一月すへ卯日

み神楽之あくる日

あんこ神楽参

かたおか蔵之助

同 五郎右衛門

御神楽九郎右衛門其外

右相済

谷村弥七郎

これ三ツ
九兵衛

柏村左兵衛

能村主計

しよじ之米はらい

座中へ

しよじのふるまいハ座中

後之一らうやく

京楽人ふるまい銀

両方四分六分

右五ツ之付三ツハ六分しよじ

二ツハ四分しよじ

小林仁右衛門 ひかへ

神楽座神人小林家旧蔵古文書目録

| 史料 番号 | 文書名 | 年月日 | 西暦 | 形状 | 差出人 | 宛名 | 備考 | 分類 |
|----------|--------------|---------------------|------|----|-----------------------------------|---|--------------------------------|------|
| 1 | 補任状 | 延宝3年正月10日 | 1675 | 豎紙 | 神官紀宿祢檢知豊親(花押)(印) | 勾当大夫小林九郎右衛門尉重清 | 包紙上書「補任 小林九郎右衛門尉」、石清水八幡宮寺御神楽座職 | 補任 |
| 2 | 補任状 | 貞享3年12月18日 | 1686 | 豎紙 | 神官紀朝臣檢知豊親(花押)(印) | 勾当大夫小林仁右衛門尉 | 包紙上書「補任 勾当大夫」、石清水八幡宮寺御神楽座職 | 補任 |
| 3 | 補任状 | 享保元年12月16日 | 1716 | 豎紙 | 神官檢知從五位下行土佐守紀季豊(花押)(印) | 勾当大夫小林九郎右衛門 | 包紙上書「補任」、石清水八幡宮寺御神楽座職 | 補任 |
| 4 | 補任状 | 宝暦8年3月朔日 | 1758 | 豎紙 | 神官檢知從五位下行和泉守豊高(印) | 勾当大夫小林仁右衛門延勝 | 石清水八幡宮寺御神楽座職 | 補任 |
| 5 | 補任状 | 文政10年12月 | 1813 | 豎紙 | 正四位下近江守紀朝臣直義(花押)(印) | 勾当大夫小林半兵衛尉橘重光 | 石清水八幡宮寺御神楽座 | 補任 |
| 6 | 補任状 | 弘化3年9月11日 | 1846 | 豎紙 | 檢知從四位下筑前守紀朝臣豊興(花押) | 勾当大夫小林九郎右衛門橘重富 | 包紙上書「補任」、石清水八幡宮寺御神楽座 | 補任 |
| 7 | 補任状 | 明治2年8月11日 | 1869 | 豎紙 | 神官檢知從五位上紀宿祢豊宣(花押)(印) | 小林九十郎橘重輝 | 石清水八幡宮御神楽座 | 補任 |
| 8 | 〔補任状包紙〕 | — | — | 包紙 | — | — | 上書「八幡宮補任 御神楽座神人通継」 | 補任 |
| 9 | 〔補任状包紙〕 | — | — | 包紙 | — | — | 上書「補任」(水損等により膠着) | 補任 |
| 10 | 〔補任状包紙〕 | — | — | 包紙 | — | — | 上書「補任」(水損等により膠着) | 補任 |
| 11 | 補任状 | 天和2年7月12日 | 1682 | 豎紙 | 依幼少用印判、公文所(印) | 松田五郎兵衛尉秀道 | 石清水八幡宮寺符 胸形神人職 | 補任 |
| 12 | 補任状 | 安永9年8月11日 | 1780 | 豎紙 | 神符務公文所 | 國本勘治藤原美啓 | 石清水八幡宮寺符 胸形神人長職 | 補任 |
| 13 | 神拝之作法 | 慶安2年 | 1649 | 折紙 | 宮寺大夫大伴宿祢弥久金 | 九郎右衛門尉殿 | 祝詞あり | 神道 |
| 14 | 神拝之作法 | 延宝4年正月15日 | 1676 | 折紙 | 神官紀宿祢豊親(印) | — | 別に「神拝の次第」あり | 神道 |
| 15 | 神拝之作法 | 宝暦8年5月11日 | 1758 | 折紙 | 石清水神官檢知從五位下紀豊高(印) | 神楽座神人小林仁右衛門延勝 | — | 神道 |
| 16 | 永代かい申作敷之事 | 正保4年12月25日 | 1647 | 豎紙 | 能村二郎左衛門(花押) | 小林九郎右衛門尉参 | 字はんか、1石2斗、舂ハ地子舂 | 貸借 |
| 17 | 本物借状之事 | 寛文10年12月1日 | 1670 | 豎紙 | かり主九郎右衛門(印)・口入孫左衛門(印)・使久右衛門(印) | 玄澄房(坊)参 | 御神楽座知行を質に銀子借用 | 貸借 |
| 18 | 本物借状之事 | 寛文10年12月1日 | 1670 | 豎紙 | かり主九郎右衛門(印)・口入孫左衛門(印)・使久右衛門(印) | 玄澄房(坊)参 | 神楽座知行を質に銀子借用 | 貸借 |
| 19 | 譲状之事 | 元禄3年6月2日 | 1690 | 豎紙 | 増祐(印)・九郎右衛門(印) | 仁右衛門参 | 御神楽座の知行買得 | 貸借 |
| 20 | 預り申銀子之事 | 享保11年12月24日 | 1726 | 豎紙 | 九郎右衛門(印) | 谷村右兵衛殿 | 御朱印之内下奈良本米二階堂村佐小分を質につき | 貸借 |
| 21 | 証文之事 | 享保15年4月6日 | 1730 | 豎紙 | 請人なまず村勘四郎(花押)・実父伊勢屋源兵衛(印)・同母きよ(印) | 小林九郎右衛門殿 | 当三月十九日出生の娘かねを不通養子につき | 町年寄役 |
| 22 | 送り一札 | 宝暦9年5月 | 1759 | 豎紙 | 山路町年寄小寺喜六(印) | 壇所町 御年寄中 | 茂兵衛転宅につき | 町年寄役 |
| 23 | 預り申銀子之事 | 宝暦10年12月11日 | 1760 | 切紙 | 壇所町吉郎兵衛(印) | 長浜新右衛門殿 | 丁銀222匁7分4厘、来る已12月元利返済につき | 貸借 |
| 24 | 済証文之事 | 天明8年2月 | 1788 | 豎紙 | 本人壇所町九郎右衛門・孫才二郎他4名 | 京都法然院御知事中清水喜喜内殿 | 借用銀減額にて返済につき | 貸借 |
| 25 | 請取覚 | 天明8年2月 | 1788 | 豎紙 | 京都獅子谷法然院・八幡山下昌玉庵役人清水喜内(印) | 本人壇所町九郎右衛門殿・御世話人同町茂兵衛殿・御世話人同町徳兵衛殿・古証文請人生津七重郎殿 | 返済銀受取及び田地証文戻しの請書 | 貸借 |
| 26 | 永代譲り渡申居屋鋪之事 | 文政13年11月 | 1830 | 豎紙 | 譲り主与左衛門 | — | 金子5両で高5斗2升の居屋敷 | 貸借 |
| 27 | 借用申銀子之事 | 慶応元年12月 | 1865 | 豎紙 | 借用人松屋清兵衛・請人堀屋勘兵衛 | 西福寺御世話方中 | 銀式貫目 西福寺修理銀 利足月九采 | 西福寺 |
| 28 | 請合証文之事 | 明治2年12月21日 | 1869 | 豎紙 | ノムラ西村新之丞 | 八わた小林由兵衛殿 | かの義古手商売致度、壹ヶ年の仕返りにて請合 | 貸借 |
| 29 | 〔知行譲状断簡〕 | — | — | 切紙 | 増祐 | 仁右衛門参 | 前欠。知行の外銀子・衣類・諸道具残らず譲る | 貸借 |
| 30 | 預申事 | い(亥)12月27日 | — | 豎紙 | 吉兵衛(印)・久次郎(印)・徳兵衛(印)・吉郎兵衛・小兵衛(印) | — | 丁銀81匁借用、ね(子)9月切返済につき | 貸借 |
| 31 | 預申銀子事 | — | — | 豎紙 | 長次郎(印)・小兵衛(印)・吉郎兵衛・証人久次郎・徳兵衛・喜兵衛 | 柏村助右衛門様 | 文銀90目借用につき | 貸借 |
| 32 | 一札 | 未年12月24日 | — | 豎紙 | 本人壇所九郎右衛門(印)・請人生津七右衛門(印) | 昌玉庵様御役人衆中 | 銀23匁1分借用につき | 貸借 |
| 33 | 持寄講落札銀借用一札之事 | — | — | 豎紙 | — | — | 下書き、(No.52～54 間速力?) 銀子900匁 | 講 |
| 34 | 日のとうわふう | 寛永4年11月4日 | 1627 | 豎紙 | — | — | 惣ノ市・太夫兩人合銀130目 | 神楽座 |
| 35 | 乍惡返答仕候 | 万治2年12月6日 | 1659 | 雜紙 | 檀所町小林市左衛門(印) | 御奉行様 | はたごや惣兵衛神楽座出座、けがれの火交わり商売につき | 神楽座 |
| 36 | 御神楽下行 | 延宝3年寅ノ11月(延宝2寅の誤記カ) | 1674 | 折紙 | — | — | 惣合3石3斗 かくら老座分諸役人下行配分 | 神楽座 |

| 史料 番号 | 文書名 | 年月日 | 西暦 | 形状 | 差出人 | 宛名 | 備考 | 分類 |
|----------|--------------------|------------|------|-----|-----------------------------------|-------------------|--|------|
| 37 | 神役之書上ケ | 正徳元年7月17日 | 1711 | 縦紙 | 小林仁右衛門 | 御奉行様 | 神楽座神人勾当大夫代々朱印高2石8斗 | 神楽座 |
| 38 | 高二石三斗貳升（郷石掛米覚） | 延享3年9月 | 1746 | 縦紙 | 小林謙・小林九郎右衛門 | 河原崎伊織殿 | 味右衛門分田地郷石掛を壇所会所へ出す | 町年寄役 |
| 39 | 覚 | 延享4年正月 | 1747 | 縦紙 | 小林九十郎（印）・河村惣十郎（印）・小林市左衛門（印）他4名 | — | 神職上座（壇所町・根元町）下座（百姓）、古法やぶり争論につき | 町年寄役 |
| 40 | 神楽座入之定書 | 宝暦8年2月 | 1756 | 縦紙 | 三官大夫 | — | 仲間座入賦り物、振舞俵約につき | 神楽座 |
| 41 | 〔安居石打・百貫打銭持参命令書〕 | 宝暦10年11月 | 1760 | 縦紙 | 郷中（印） | 檀所町 | 裏書に受取と割印あり | 町年寄役 |
| 42 | 帯刀名前之覚 | 明和2年9月 | 1765 | 縦紙 | 辻村仁兵衛（印）・小林九郎右衛門（印）・辻村佐兵衛（印） | 御当職様御役人中様 | 小林九郎右衛門（印）・辻村佐兵衛（印）・小林市左衛門（印）他合わせて9名書上げ | 町年寄役 |
| 43 | 乍恐御願奉申上口上覚 | 天明6年11月13日 | 1786 | 縦紙 | 講中惣代津国屋治兵衛（印） | 御当職様御役人中様 | 当町西福寺毘沙門堂大破、普請費用調達の頼母子官許願。檀所町年寄辻村甚兵衛の奥書（印）あり | 西福寺 |
| 44 | 口上（済証文之控） | 天明8年2月 | 1788 | 縦紙 | 本人檀所町九郎右衛門・同町組諸人茂兵衛・同町諸人徳兵衛他1名 | 京都御谷法院院御知事申請本宮内殿 | No.24と同内容 | 貸借 |
| 45 | 定書 | 文化13年9月 | 1816 | 縦紙 | 小林市右衛門（印）・小林小左衛門（印）・辻村市之助（印） | 小林九郎右衛門殿 | 町内次郎左衛門宗旨帳面差出し名字帯刀お尋ねにつき | 町年寄役 |
| 46 | 覚（宮守神楽座帯刀人調） | 文政元年9月 | 1818 | 縦紙 | 年寄九郎右衛門（印）・同小林市右衛門（印） | 御当職様御役人中様 | 帯刀人4名書上 | 町年寄役 |
| 47 | 一札之事（宗旨改） | 文政5年8月 | 1822 | 縦紙 | 橋本町本祥寺（印） | 八幡壇所御町内中 | 津国屋傳次郎妻八重は代々法華宗につき | 町年寄役 |
| 48 | 宗旨手形 | 文政5年8月 | 1822 | 縦紙 | 惣本山末念佛寺（印） | 檀所町御年寄中 | 当人友右衛門・女房すて・伴寅吉、高木屋源兵衛名跡相続につき | 町年寄役 |
| 49 | 山城国綴喜郡八幡（壇所町家数人数調） | 文政5年6月 | 1822 | 縦紙 | 檀所町年寄小林九郎右衛門・小林小左衛門 | 御当職様御役人中 | 家数28軒・男53人・女54人 | 町年寄役 |
| 50 | 法類請一札 | 文政5年5月 | 1822 | 縦紙 | 下奈良村正光寺（印） | 彈正町九郎右衛門殿・同所小左衛門殿 | 西福寺無住にて法類清壽住職致すにつき | 西福寺 |
| 51 | 持寄講落札借用一札之事 | 慶応元年12月 | 1865 | 縦紙 | 借用人道具屋武右衛門（印）・諸人大住屋辰右衛門（印） | 講元伝兵衛殿・御世話方中殿 | 銀2貫目を毎会200目宛返済 | 講 |
| 52 | 持寄講落札銀借用一札之事 | 慶応2年4月3日 | 1866 | 縦紙 | 借用小組座町嘉左衛門（印）・諸人下奈良村奎左衛門 | 講元大和屋金藏殿世話方中 | 銀子900匁、毎会100匁宛寅四月より午霜月迄返済 | 講 |
| 53 | 持寄講落札銀借用一札之事 | 慶応2年4月3日 | 1866 | 縦紙 | 下奈良村借用小奎左衛門・組座町引請証人嘉左衛門（印） | 講元大和屋金藏殿世話方中 | 銀子900匁、毎会100匁宛寅四月より午霜月迄返済 | 講 |
| 54 | 持寄講落札銀借用一札之事 | 慶応2年4月3日 | 1866 | 縦紙 | 東山路町借用小近江屋半兵衛（印）・表山路町引請証人総屋仁兵衛（印） | 講元大和屋金藏殿世話方中 | 銀子900匁、毎会100匁宛寅四月より午霜月迄返済 | 講 |
| 55 | 持寄講落札借用一札之事状 | 慶応2年4月 | 1866 | 縦紙 | 借用人堀屋源兵衛（印）・諸人念佛寺（印） | 講元傳兵衛殿御世話方中 | 銀1貫800目、毎会200目宛返済 | 講 |
| 56 | 〔書状〕 | 8月4日 | — | 縦紙 | 西村拝 | 小林御氏 | 面会の節ちかの名前に印下すにつき | 個人 |
| 57 | 〔書状〕 | 12月12日 | — | 縦紙 | 田中大次勝行（花押） | 小林仁右衛門 | 入家婚儀等も無滞相調につき | 個人 |
| 58 | 〔書状〕 | 11月29日 | — | 切縦紙 | 吉郎兵衛様 | 六左衛門 | 銀借用田地売却、買主京都の人、挨拶人当村八左衛門につき | 個人 |
| 59 | 〔書状〕 | 壬申2月15日 | — | 縦紙 | 西村 | 小林御氏様 | 兵助を京都へ引合致とも返答無につき | 個人 |
| 60 | 〔書状〕 | 9月11日 | — | 縦紙 | ノムラ西村新之允 | 八わた由兵衛様 | 石田村周藏殿上京、約束の明12日を見合わせ頼み | 個人 |
| 61 | 覚 | 7月17日 | — | 縦紙 | 西村新之丞 | 小林由兵衛殿 | 金5両当月晦日限り渡し | 個人 |
| 62 | 覚 | 7月17日 | — | 縦紙 | 西村新之丞 | 八わた小林由兵衛殿 | 金10両当月晦日限り渡し | 個人 |
| 63 | キ（ぶり・ちりめん等代金書上げ） | — | — | 縦紙 | 魚嘉 | 小林様 | 「渡ス」（異筆）により、請求代金支払済の覚 | 諸勘定 |
| 64 | 記（針代等代金書上） | 1月初 | — | 縦紙 | 下結や | 小林九十郎様 | 「渡ス」（異筆） | 諸勘定 |
| 65 | キ（種油等代金書上） | 1月31日 | — | 縦紙 | 家村 | 小林九十郎様 | 「渡ス」（異筆） | 諸勘定 |
| 66 | 記（白米代書付） | 1月初 | — | 縦紙 | 梶長 | 小林九十郎様 | 「渡ス」（異筆） | 諸勘定 |
| 67 | キ（うどん・ぶり等代金書上） | 1月初 | — | 縦紙 | 天喜 | 小林九十郎様 | 「渡ス」（異筆） | 諸勘定 |
| 68 | キ（うどん・井等代金書上） | 12月31日 | — | 縦紙 | 山城綴喜郡八幡町朝日屋 | 小林九十郎様 | 「渡ス」（異筆） | 諸勘定 |
| 69 | 〔代金勘定覚〕 | 西ノ12月 | — | 縦紙 | 木や庄右衛門 | 旦所丁九郎右衛門 | 木わた・大豆・餅米等 | 諸勘定 |
| 70 | 〔桑名・尾張等定宿年寄等人名書上〕 | — | — | 断簡 | — | — | No.71 関連㊦、前欠 | その他 |
| 71 | 〔東海道宿場別代金書上〕 | — | — | 断簡 | — | — | No.70 関連㊦、前後欠 | その他 |
| 72 | 〔木綿・米・下地等代金勘定覚〕 | 11月24日 | — | 切紙 | 木や庄右衛門 | たん所九郎右衛門殿 | 前欠㊦、No.73 関連㊦ | 諸勘定 |

| 史料 番号 | 文書名 | 年月日 | 西暦 | 形状 | 差出人 | 宛名 | 備考 | 分類 |
|-----------|-------------------------|--------------------|------|----------|-------------------------|-----------|--|------|
| 73 | 〔米・油等代金勘定覚〕 | 酉7月 | — | 切紙 | 木や庄右衛門 | たん所九郎右衛門殿 | 前欠、No.72 関連 | 諸勘定 |
| 74・ 75 | 男山八幡宮全山図 | 明治11年9月13日 出版御届 | 1878 | 絵図 | 著者辻村豊富（印）・出版 人中嶋敬次郎 | — | 水損シミあり | その他 |
| 76 | 〔包紙〕 | — | — | 包紙 | — | — | 上書「本迹縁起[]」朱印 あり、77を包む | その他 |
| 77 | 〔亀乗寿老人図〕 | — | — | 絵画 | □白堂[]（印）（署名 部分破損甚大） | — | 紙本墨画淡彩。 | 個人 |
| 78 | 〔楽人衆・惣ノ一殿・太夫等 下行代書上〕 | — | — | 横帳 | — | — | 「古き日記ヲ以テうつしお くものなり」とあり | 神楽座 |
| 79 | 〔楽人衆・惣ノ一殿・太夫等 下行代書上〕 | — | — | 横帳 | — | — | No.78と同内容 | 神楽座 |
| 80 | 御願申川堀雑用之覚 | 辰4月10日 | — | 竖紙 | 檀所町年寄辻村仁兵衛 | 郷御役人中様 | 車損料・ろうそく・油代金 書上 | 町年寄役 |
| 81 | 〔檀所町宗門改断簡〕 | — | — | 断簡 | — | — | 念仏寺辻村左兵衛（印）・ 家族の年齢、惣家数32軒、 外寺1ヶ寺、惣人数124人。 帳はずれ | 町年寄役 |
| 82 | 〔神楽下行米配分覚〕 | — | — | 竖紙 | — | — | — | 神楽座 |
| 83 | 〔書状〕 | 寛永11年8月22日 | 1634 | 折紙 | 惣市（花押）（印） | 後大夫参 | 八幡宮下遷宮正遷宮神楽銭 受取につき | 神楽座 |
| 84 | 神典雜鈔 | 寛文6年8月刊行 | 1666 | 竖帳 | — | — | 簞藁内伝・六根清浄祓・同 浅説・唯一神道俗解・中臣 祓古義の写、末尾「右二部 文政二年五月出雲郡求院村 光栄寺ノ蔵本ニ仍テ鈔出 ス、舊題六十七歳」 | 神道 |
| 85 | 服忌令 全 | 宝永5年子5月吉日 | 1708 | 竖帳 | 八幡壇所町小林仁右衛門 | — | 石清水八幡宮社例号服忌令 | 神道 |
| 86 | 修理講 | 明和6年11月27日 | 1769 | 竖帳 | — | — | 修理講銀受取、12名の講 定、明和6年～安永3年 頼母子講銀預証写 | 講 |
| 87 | 安居御神楽出勤人数 | — | — | 折紙 | — | — | 筆策 從四位下嵯守安倍 季福・本拍子 同撰津守多 久富ほか6名の楽人名書 上 | 神楽座 |
| 88 | 神祇道服紀（マ）令 | — | — | 横 半 帳 | — | — | 巻末「吉田之服紀令以令二 書写一者也」とあり | 神道 |
| 89 | 〔和歌〕 | — | — | 短冊 | — | — | 「こほる うちわたるこ まなつむなり、白妙のこ ほるまつちのやま河の水」 「三十六枚ノ内（印）」とあり | 個人 |
| 90 | 御社用参神楽式日 | — | — | 竖紙 | — | — | 正月から十一月初卯まで 13の式日書上 | 神楽座 |
| 91 | 石清水八幡宮御祈祷御札 | — | — | 札 | 本頭神人奥村播磨 | — | — | 神道 |
| 92 | 六根清浄祓 | — | — | 竖紙 | — | — | 朱の訓点あり | 神道 |
| 93 | 〔放生会次第〕 | — | — | 縦紙 | — | — | 前欠。「於散花師前 次行 導 先獅子次楽行事次楽人 衆・・・」 | 神道 |
| 94 | 安居神楽覚帳 | 宝永2年2月1日 | 1705 | 横帳 | — | — | 裏表紙「小林仁右衛門ひか へ」とあり | 神楽座 |

たけなか
ゆりよ(二〇一八年十月一日受理)
文学部歴史学科 特任講師